

三、パネリストによる問題提起(1)

五味 俊 樹

(安)

村井先生ありがとうございました。

引き続きまして五味先生と岡村先生に二十分ずつコメントを頂くことになるんですが、十分くらい休憩をさせて頂きます。その間に、皆さまにすでにお配りしている質問用紙があります。そこに、基調講演をしていただいた四人の先生方について、何か質問やご批判がありましたら書いて下さい。そして、必ず自分の所属及び名前を書いて下さい。五味先生と岡村先生がコメントしている間、私が整理・分類してそれぞれの先生方に、こういう質問があることをお知らせして、コメントが終わった後に、各先生から十分ずつこの質問に対してお答えをして頂くということで、ディスカッションを進めていきたいと思っています。だいたい五時に終える予定です。

では、十分間、休憩させて頂きます。

……………休憩……………

再開したいと思います。では、時間も制限がありますので、五味先生からコメントを頂くことになるんですが、五味先生よろしくお願ひします。

(五味)

それでは、私の方から二十分ということなんですけれども、二十分も必要ないかも知れませんが、私なりのコメ

ントをさせていただきたいと思えます。そのコメントに先立ちまして、現在の東アジアの国際環境を考えていきますと、このシンポジウムの共通のテーマは、「東アジアにおける新国際秩序」となっているわけですが、この「新国際秩序」が果たして形成されているかという疑問がわいてきます。結論から言いますと、現状におきましてはあまりにも無秩序、不安定な状況にあるということになります。そういう意味では、このシンポジウムは「新国際秩序を模索する」と考えるべきではないでしょうか。というのも、ここ二、三ヶ月の間、特に東アジア情勢は流動的になってきているからです。そうした状況を踏まえた場合、今まで日本の中で行われてきた議論の仕方というのは、あまりにも平和的かつ楽観的すぎたのではないかと思うんです。特に大学の中や一部のマス・メディアがそうでした。これに関して、村井先生が強調されたようにリアリズムに基づいた議論が必要ではないでしょうか。また、アメリカの先生からのご報告は、見事なまでに事実に基づく評価のされ方をしています。我々は、基本的なスタンスとして、確かに未来に向けての理想的なものを描き出すことは必要ですが、もっと地についた形での議論をすべきだと考えます。そういうところが、多くの日本人には欠落しているように思われます。このことに関連して、まずシンポジウムの共通テーマを「東アジアにおける新国際秩序」としたわけですが、現状としては「新秩序」を期待することはきわめて困難だと言わざるを得ません。もっとも、このテーマを決める際、私自身が参画していますから自己批判すべきですが。要するに、東アジアにおいては新国際秩序が形成されるには、あと五、六年ぐらいはかかるのでは、つまり二十一世紀の初頭まで待たねばならないように思います。その意味で、ヨーロッパとは大分、様子が違うのであります。

ところで、スナイダー先生のお話に関してですが、非常にシステムティックに語られていまして、ほとんど私が反論を加える余地はございません。ただし、二つだけ伺ってみたいことがあります。まず第一は、一期目のクリン

トン政権でアジア政策に非常に大きな役割を演じ、現在、ハーバード大学に戻ったジョセフ・ナイという国際政治の専門家に関係するものです。彼は、アメリカの東アジア政策に関する報告書を出し、その中で、アメリカは、かつての敵国であった中華人民共和国とか、あるいは、いわゆる北朝鮮といった国々を国際社会の中に積極的に招き入れて、それで、民主的な体制あるいは国際社会における共通のルールに基づいて行動するように仕向けていくべきだと主張しています。いわゆる「エンゲージメント・ポリシー」というものを打ち出したわけですね。それがジュネーブでの合意であったと思いますし、さらにそれを徹底させるという、「四者協議」に繋がったんだと思います。けれども、最近の八月末に起きた、いわゆるテポドンの発射ということによって、アメリカは少し、北朝鮮政策を変更せざるを得なかったようなところがあります。

それからもう一つは、つい最近出てきたことに、核開発施設疑惑というものがあります。この二つを以って、アメリカが、完全に「エンゲージメント・ポリシー」を変えようとしているのかどうか、というところですね。

第二には、村井先生のお話からしますと、内政干渉がましいことになるわけですが、北朝鮮内部に関係するものです。北朝鮮の大きな問題点は、政策決定者が誰であり、また、何を以って国際社会に係わろうとしているかが極めて不透明である。それで、国内においては、民主化が全然進んでいない。そういうことから出てくる諸々の不安定要因に対して、アメリカは、「四者協議」なり、これから出来るかどうか分からない「六者協議」などの機会をとらえて、イニシアティブを取って北朝鮮の政策の安定性と言いますか、あるいは透明性を正に「エンゲージメント」させ、約束をきちっと取り付けていく。アメリカはそのようなことをやろうとしているのか、あるいは、そういうことは暫くしないで、政策を変更しようとしているのか。この辺のところについて、新しい動きなり、ワシントンにおけるアメリカ政府の基本的な考え方が、あるようでしたらお伺いしたいのであります。

それから、浅野さんに対してですけれども、やはり、ジャーナリストですので非常に現実の細かいところをよくご存じですので、逆にこれも質問になります。つい先日、ある安全保障の専門家の方が、テレビの番組で、次のようなことを話されていました。その方は、佐々淳行さんですけれども、今年の八月末に北朝鮮から打ち上げられたミサイルについて、日本の海上自衛隊の「妙高」という艦隊が、実は正確にそれを捕捉しており、きちんと情報をキャッチしていたということらしいんですね。それに対して、実はアメリカは、このことについて見過ごしてしまい、アメリカからすると非常に危機意識があつて、それで今回、クリントンが韓国に訪問した時も、北朝鮮に対して非常に強硬な姿勢を示すことに繋がったのではないかと述べていらつしやつたんです。そして、日本の政府においては、北朝鮮からは衛星を打ち上げた可能性もあつたわけですが、もし衛星だつた場合、大気圏外に出るためには秒速七ないし八ぐらいが必要になる。もつとも、その辺のところは、先ほど村井先生にお伺いしましたら、必ずしもきちんとしていないということらしいんですが・・・ただし、海上自衛隊の「妙高」の分析では今回のものは秒速がそれ以下であつたというのです。そうすると、明らかにミサイルであつて、衛星ではないことなるわけですね。これが本当か嘘かは分かりませんが、浅野さんが先ほどご指摘されたように、あれはテポドンであり、ミサイルであるということと符合します。それに対して、日本の政策は、非常に曖昧な形で対応しています。実は、衛星であるか、ミサイルであるかは、あまり重要な問題ではないわけですね。むしろ、弾道に何を付けるかということこそが重要な問題なのです。そうしたことに対して、日本の政策決定者やマス・メディアが、その辺のところをきちんと説明や報道していない。あるいは、分析していないように思われます。そういうことがきちんとなされているかどうかについて、現場の人達の認識をお伺いできたら有り難いと思つています。

僕自身としては、弾道に、いろんな物を付けられるわけですね。たとえば、サリンを付けるとかいうことさえも可

能なわけで、したがって、少なくとも北朝鮮が、ミサイルでかなりの距離に到達出来る、そういう能力を持ったということの重大性、そういうものについて、我々はもう少しきちんと認識しておく必要があると考えています。つまり、リアリズムに基づいた認識が必要なんです。そこで、浅野さんは、日本が北朝鮮に対して、あまり積極的な政策は取れないというような、あるいは消極的な関与しか選択肢は無いという、ご指摘なのですが、北朝鮮への政策を、国際社会の共通のルールの中に従わせていくような方法は取れないものでしょうか。つまり、そういう枠組みを日本のイニシアティブによつてできないものだろうか、その点、もしお伺いできましたら有り難いのでございます。

そして、三番目のシーラ・スミス先生ですが、これに関しては、先ほどの佐々さんの考え方と今日お話を伺ったシーラ・スミス先生のご報告とを調和させることが、実は非常に難しい。つまり、あちらを立てればこちらが立たずという、アンビヴァレントな問題を抱えているように思います。アメリカの方から、日本の沖縄住民の気持ちをもう少し反映するような政策決定の在り方を確立すべきだとするご意見はまことに有り難い。

また、アメリカ政府の中にもそうした意識を持たせなければならぬという、ご指摘は大変心強いし、我々もそういうことを考えなければいけないと思います。けれども、そういう要請と、もう一つ、それは佐々さんの話の中に出てくるんですが、アメリカがなぜ現在、沖縄において兵力を削減する考えはなく現状を維持するのか、それから、日本政府が、アメリカの意見に従うような形でさまざまな協調関係ないしは政策を築き上げようとするのかという、もう一方の要求をも併せて考えなくてはならないわけです。後者の問題は何と言っても、北朝鮮の動き、それと、中国が武力を以ってしても、台湾を解放するという、政策を捨てていないことに起因しています。この二つの不安定要因といえますか、国際環境を乱す動きに対して、それをさせないようにしていくいわば「抑止力」

が求められます。その「抑止力」に関して、その最も効果的な地理的位置は、やはり、沖縄ではないか、ということになります。その考え方には、どうしてもそれに完全に反論出来ない現実的な要請があるのではないか。なぜ、沖縄かと言えば、台湾海峡についてはすぐ出て行ける所ですね。それから、北朝鮮に対しても、すぐ行ける距離にあると、しかも、日本の自衛隊が持っている、いわゆる、ミサイル迎撃能力ということを考えればアメリカにある程度の協力を仰がないと出来ない。そういう状況が、現在日本の防衛力の中にあるのではないか、というところがあるわけですね。そうなってくると、住民の民主的な声というものと、それから、国際環境から来る現実的要請とをどうやって調和していくかが、避けて通れないのです。これについては、何か建設的な意見をアメリカ人の方からいただくというよりは、むしろ日本人自身が考えて、現実的な政策を打ち出していくことが必要だと思っんです。その際、沖縄の基地を削減して、それで別の所に持っていくということが、軍事戦略的観点からして果たして現実的な政策であるのかどうかということについて、もし、ご見解がお伺いできたら有り難いと思います。

それからもう一つは、お話の中には出てこなかったんですが、日米ガイドラインの問題なんです。これについては、日本人としてあるいは主権国家としての日本国民からすると、現在進行中のガイドラインの中には、主権の関係が少し不平等になっている。そういう部分があるので、はなからうかということ懸念しています。それはどういうことかと言いますと、新しいガイドラインでは、地方自治体の施設あるいは民間の施設もアメリカ軍に提供していくという、内容を含んでいるわけですね。これについては、軍の行動において、日本の民間の、あるいは、東京の中央政府ではなくて地方の自治体の施設等々が使われていくという、問題点がある。これは、新しい動きではないかと思います。それに対して、果たして日本がきちんとNOということが言えるのかどうか・・・現在のガイドラインではその辺のところは、一応日本の政府の意向をまず質してから、ということになっているんですけれ

ども、これまでの日米関係のパターンを見ていきますと、日本政府は、アメリカ政府に信頼してというようなことで、日本がNOと言うことはなかったという問題があるわけですね。したがって、現在進めている日米ガイドラインの中身をもう少し我々は、再検討する必要があるのではないか。最近の議論としては、北朝鮮の脅威、あるいは台湾海峡の不安定な状況に照らし合わせて、すぐにガイドラインを日本の国会で通過させるべきであるという、傾向が強い。実際、クリントンは訪日前に、日本に対して早く国会で立法化せよ、ということを行っているわけなんです。しかし、内容については日本サイドからすると、かなり不平等な関係になっている。この点、ご意見をお伺いしたいと思います。

それから、村井先生のご報告ですが、まさにその通りだと思います。ただし、日本の場合、中国に対しての対応の仕方には、部分的にはやむを得ないものがあつたと思うんですね。これは、やはり第二次世界大戦における日中間の大きな争い、そういうものがそうさせていて、日本には、遠慮があつて、対中関係をぎくしゃくしたものにしたいというものが働いています。しかし、それにしても、日本の対中政策は、もう少し言うべきところは言ってもいいんじゃないかという、部分があります。その中で最も重要なものは、中国における台湾に関する政策であり、それから、日本に対しては、友好的な関係を築き上げるということを中国もはっきりと具体的に示すべきだと思います。謝罪の一方的要求は、片手落ちです。日本との親善友好をきちんと示せるような何か具体的なものが出てくる必要があるんじゃないか、と思います。その中の最も日本に関わる、より具体的には、日本の安全保障に関わる問題としては、やはり、台湾との関係であります。これは、国内問題であるというふうに言われてしまえばその通りになってしまうんですけれども、しかし、それを武力で以って解放していくという政策を放棄しない限りにおいては、やはり、そこに日本からすれば、不安材料として残るわけです。この点を中国の方からきちんと「我々

は平和的政策を打ち出すんだ」という、言質が得られないところにおいては、真の友好というのはなかなか難しいのではないかと感じるわけですね。そういうところを、日本側からも中国に対してついていくことが必要ではないか、という感じがしてならないのです。ですから、村井先生へのコメントや質問になっていないのですが、一点だけ、戦争を起こすときに指導者というのは、必ず合理的な選択をするわけではないということを、お伺いしたいと思います。この点について、北朝鮮の指導者が「清水の舞台から飛び降りる」というような意識になることが確率として高いのかどうか、この点を少し触れていただけますと有り難いと思います。以上です。

(安)

五味先生ありがとうございました。